
名前 「

」

その山やまのさま、高く麗うるわしく、『これや、わが求もとむる山やまならむ』

と思おもひて、さすがに怖おそろしく覚えて、山やまのめぐりをさしめぐらし

て、二、三日ばかり見ありくに、天人てんにんの装よそおひしたる女おんな、山やまの中なか

より出いで来て、白銀しろかねの金錠かなまるを持ちて、水みづを汲くみありく。これを見み

て、船ふねより下りて、『この山やまの名なを何とか申もうす』と問とふ。女おんな、答こた

へていはく、『これは蓬萊ほうらいの山やまなり』と答こたふ。これを聞きくに、嬉うれ

しきことかぎりなし。

この女おんな『かくのたまふは誰たれぞ』と問とふ。『わが名なは、うかんる

り』と言いひて、ふと山やまの中なかに入りぬ。

その山やま、見るに、さらに登のぼるべきやうなし。その山やまのそばひら

をめぐれば、世よの中なかになき花はなの木きども立てり。黄金こがね・白銀しろかね・瑠璃るり

色いろの水みづ、山やまより流れ出いでたり。それには色々いろいろの玉たまの橋渡はしわたせり。そ

のあたりに、照てり輝かがやく木きども立てり。

その中なかに、この取とりて持ちてまうで来きたりしは、いと悪わるかりしか

ども、『のたまひしに違たがはましかば』とて、この花はなを折おりてまう

で来きたるなり。